

9. あなたの神、主があなたに与えようとしておられる地にはいったとき、あなたはその異邦の民の忌みきらうべきならわしをまねてはならない。
10. あなたのうちに自分の息子、娘に火の中を通らせる者があってはならない。占いをする者、卜者、まじない師、呪術者、
11. 呪文を唱える者、霊媒をする者、口寄せ、死人に伺いを立てる者があってはならない。
12. これらのことを行なう者はみな、主が忌みきらわれるからである。これらの忌みきらうべきことのために、あなたの神、主は、あなたの前から、彼らを追い払われる。
13. あなたは、あなたの神、主に対して全き者でなければならない。
14. あなたが占領しようとしているこれらの異邦の民は、卜者や占い師に聞き従ってきたのは確かである。しかし、あなたには、あなたの神、主は、そうすることを許されない。
15. あなたの神、主は、あなたのうちから、あなたの同胞の中から、私のようなひとりの預言者をあなたのために起こされる。彼に聞き従わなければならない。
16. これはあなたが、ホレブである集まりの日に、あなたの神、主に求めたそのことによるものである。あなたは、「私の神、主の声を二度と聞きたくありません。またこの大きな火をもう見たくありません。私は死にたくありません。」と言った。
17. それで主は私に言われた。「彼らの言ったことはもつともだ。
18. わたしは彼らの同胞のうちから、彼らのためにあなたのようなひとりの預言者を起こそう。わたしは彼の口にわたしのことばを授けよう。彼は、わたしが命じることをみな、彼らに告げる。
19. わたしの名によって彼が告げるわたしのことばに聞き従わない者があれば、わたしが彼に責任を問う。
20. ただし、わたしが告げよと命じていないことを、不遜にもわたしの名によって告げたり、あるいは、ほかの神々の名によって告げたりする預言者があるなら、その預言者は死ななければならない。」
21. あなたが心の中で、「私たちは、主が言われたのでないことばを、どうして見分けることができようか。」と言うような場合は、
22. 預言者が主の名によって語っても、そのことが起こらず、実現しないなら、それは主が語られたことばではない。その預言者が不遜にもそれを語ったのである。彼を恐れてはならない。

説教

申命記 18 章後半では預言者について教えられます。

16 章ではイスラエルの祭りについて教えられ、16 章後半から 17 章前半ではそれを忠実に実行する役人について教えられました。そして、17 章後半から 18 章にかけて具体的にイスラエルを統治する為政者について教えられます。その最初が 17 章後半では王について、18 章前半では祭司とレビ人について教えられ、後半では預言者について教えられます。これら三つの職務、すなわち国王、祭司、預言者は、イスラエルを統治する三大職務となります。そこで、今日は 18 章後半の預言者について学びます。

「あなたの神、主があなたに与えようとしておられる地にはいったとき、あなたはその異邦の民の忌みきらうべ

きならわしをまねてはならない。」(9) まずは、預言を妨げるカナンの土着習俗を警戒するよう教えられます。具体的には次のように禁じられます。「あなたのうちに自分の息子、娘に火の中を通らせる者があってはならない。占いをする者、卜者、まじない師、呪術者、呪文を唱える者、霊媒をする者、口寄せ、死人に伺いを立てる者があってはならない。」(10-11) 「自分の息子、娘に火の中を通らせる」とは、アモン人が行っていたモレク神崇拝の祭儀です(レビ 18:21)。「占いをする者」は、矢筒の矢をくるくる回して投げ出された最初の矢で占う占い師のことです(エゼキエル 21:21)。「卜者」は、雲を読むことによる占いの意味か、あるいは呪文を唱える者の意味です。「まじない師」は、杯の中の水の動きを観察する占いです(創世記 44:5,15)。あるいは、鳥や火や雨などの自然現象を観察することによる占いです。「呪術師」は、魔術的目的のために薬草を調合する人のことです。「呪文を唱える者」は、文字通りには「結び目を結ぶ者」の意味ですが、呪文で人を縛る者のことで、そこから「魅了する者」「魔法使い」を意味します。「霊媒をする者」は、死者の世界から死者を呼び起こす者のことです。「口寄せ」は、その数多の死者の中でも有名な霊に伺いを立てることのようです。「死人に伺いを立てる者」は訳の通りです。これらは、これから入植するカナンでは普通に行われていることであり、カナンのみならず古今東西を問わず今現在も世界中で盛んに行われていることです。勿論、日本でも盛んです。

しかし、イスラエルにはこれらの一切が禁じられます。理由は「これらのことを行う者はみな、主が忌み嫌われるから」です。そして、「これら忌み嫌うべきことのために、あなたの神、主は、あなたの前から、彼らを追い払われる」とも言われます(12)。偶像崇拝とそれに関係する習慣を神が忌み嫌い、約束の地カナンから彼らを追い出してしまうのです。ということは、イスラエルが同じことをするなら、神は彼らを忌み嫌い、カナン人と同じようにカナンから追い出すことになります。

モーセは言います。「あなたは、あなたの神、主に対して全き者でなければならない。」(13) そして、こう総括します。「あなたが占領しようとしているこれらの異邦の民は、卜者や占い師に聞き従ってきたのは確かである。しかし、あなたには、あなたの神、主は、そうすることを許されない。」(14)

それでは、イスラエルは誰に聞けばいいのでしょうか。モーセは言います。「あなたの神、主は、あなたのうちから、あなたの同胞の中から、私のようなひとりの預言者をあなたのために起こされる。彼に聞き従わなければならない。」(15) 神が「ひとりの預言者」を起こすので、「彼に聞き従わなければならない」と言われます。霊媒やおみくじ、自然現象の解釈といった、人の都合でどうにでもなる、自分勝手にデタラメないい加減な手段で神のみこころを知ろうとするのではなく、神のことばを神から託された預言者を通してみこころを知れと言うのです。

「あなたの神、主は...起こされる」とあるように、「預言者」は神ご自身が立てます。そして、「あなたのうちから、あなたの同胞の中から」とあるように、「預言者」は異邦人ではなく、イスラエル人です。しかも「私のようなひとりの預言者」と言われるように、「預言者」は「モーセのような預言者」です。それは、多くの不思議や奇跡を行う預言者という意味ではなく、忠実に神のことばを語る預言者という意味です。

異教社会では、神を無視して人間が勝手に生きています。自分で偶像を作り、勝手に考え出した方法で「神のお告げ」を演出します。そうして結局は、人間が自分勝手に生きています。偶像崇拝の本質は人間中心なのです。これに対して、イスラエルに於いては、人ではなく、神が中心です。神のみこころは、人が勝手な都合で変更できません。それは、永遠に変わることなく、二枚の石板に刻まれ、律法として誰の目にも明らかに啓示されています。「私のようなひとりの預言者」と言うモーセは、誰よりも多くの偉大な奇跡を行った力ある預言者でした。「モーセのような預言者は、もう再びイスラエルには起こらなかった」とあるほど、預言者としては最も偉大な働きをします(申命記 34:10)。でも、だからといって、神のみこころを変更することは許されません。どんなに偉大な人物でも、律法に刻まれた神のみこころを勝手に変えることは許されないのです。

これがイスラエルです。神の民イスラエルです。イスラエルは神のことばによって生きています。神のことばは彼らのいのちです。そして、その神のことばは既に永遠に定まっています。これに付け加えることも差し引くことも許されません。それは、雲の動きがどうか、亀の甲羅の割れ方で解釈するといった、あやふやな方法で知るものではありません。律法として永遠に啓示され、具体的にそれを忠実に伝える預言者を通して人々に知られます。そしてモーセは、忠実に神のことばを人々に伝えました。神から教えられた律法を混ぜ物なしに教えます。これが「モーセのような預言者」です。神は、ご自身が直接立てた「モーセのような預言者」を通して、イスラエルの民を教えるのです。

ちなみに、この「モーセのようなひとりの預言者」は、モーセがこれから死ぬその後も「モーセのような預言者」を神が起こしてくださるので聞き従えとの意味でしたが、後の時代には来たるべきメシヤ的大預言者を示すものとして待望され、イエスさまに於いてこれが成就したと使徒は説教しました（使徒 3:21-23）。人となって世に來られた、神のことばそのものなるイエスさまこそ、完成した全き預言者です。

16 節には、神が預言者を立てた理由が説明されています。それによると、シナイ山で神がイスラエルに現れた際、あまりの恐怖に直接神の声を聞くことを人々が恐れたからでした。それで神は、直接彼らに語るのではなく、彼らの中から起こした「預言者」という、彼らと同じ弱い人間を通して語りかけることになさいます。雷鳴を轟かせ、栄光の御使いを従えて、全地を揺るがす大音声で天から語るならば、人々はすっかり恐怖におののいて、神のことばを聞くことができません。それで、罪深く弱い彼らのことを配慮し、同じく罪深く弱い人間を通して、交わりによって神は彼らに語りかけます。無視しようと思えばいくらでも無視できる、彼らと同じ人間によって、神は彼らを教えるのです。

とは言え、人間が語ることばではあっても、預言者が人々に伝える教えは神のことばです。その語る教えはイスラエルの命運を左右します。いい加減なことを教えるなら、イスラエルに災いをもたらします。神に聞き従えば神から祝福を受けますが、神に逆らえば神の怒りと呪いを受けて滅びます。神のことばはイスラエルのいのちなのです。どんなに聞き心地が良くても、偽預言は人を救いません。反対に、たとえ耳障りであっても、真の預言が人を罪と滅びから救います。

エレミヤの時代、「悔い改めてバビロンに降伏せよ」と教えたエレミヤの預言を無視してイスラエルは滅びました。「二年以内に神がバビロンから助けてくださる」と教えたハナヌヤの偽預言は、喜ばしく聞こえましたが、結局は実現せず、これを採用したゼデキヤ王は両目をえぐり取られて捕囚となり、これを預言したハナヌヤ自身も預言した二ヶ月後に神に打たれて死にます（エレミヤ 28:17,39:6-7）。神のことばはイスラエルのいのちです。生きるも死ぬも、神のことば次第です。

それで、これを語る者と聞く者、両者の責任が問われます。神は、モーセの言った通り、「わたしは彼らの同胞のうちから、彼らのためにあなたのようなひとりの預言者を起こそう」と言われます。「わたしは彼の口にわたしのことばを授けよう。彼は、わたしが命じることをみな、彼らに告げる」と確約し、わたしの名によって彼が告げるわたしのことばに聞き従わない者があれば、わたしが彼に責任を問う」と預言者に「聞き従わない者」の責任を問われるのです（申命記 18:18-19）。そして、一方では、忠実に神のことばを語らぬ偽預言者の責任も問われます。「ただし、わたしが告げよと命じていないことを、不遜にもわたしの名によって告げたり、あるいは、ほかの神々の名によって告げたりする預言者があるなら、その預言者は死ななければならない。」（20）

神のことばは、イスラエルのいのちです。彼らが死ぬも生きるも、神のことば次第です。彼らが神のことばに聞き従うか否か、そしてそれ以前に、そもそもその教えが本当に神からのものかどうか、語る者の責任が問われます。神が「告げよ」と命じていないことを預言と称して語るなら、神は死をもって預言者を罰せられると言うのです。

聞く方にとっても、そしてこれを語る者にとっても、これは本当にいのちのかかった真剣勝負なのです。

「預言」の真偽をどう見分けるか、最後に説明がなされます。「預言者が主の名によって語っても、そのことが起こらず、実現しないなら、それは主が語られたことばではない。その預言者が不遜にもそれを語ったのである。彼を恐れてはならない。」(22) その預言者の語った預言が実現するか否か、それによって預言の真偽を見分けよと言うのです。ですが、言ったことが実現したからと言って、必ずしも真の預言者とは限りません。先には「あなたに告げたしるしと不思議が実現して」もその結論が偶像崇拜に誘惑するものであるならば、それは偽預言者に過ぎないと教えられました(13:1-5)。予告した現象の実現と、律法の正しい理解、すなわち神の教えの全体(教理)を正しく知るといふ、この両者が不可欠なのです。

語る者も聞く者も、神のことばに聞き従う神の民として、成長し、成熟していくよう、祈ります。